古典ギリシャ語における条件文の用法について

有川貫太郎

はじめに

古典ギリシャ語における条件文は、学習的文法書では五つのタイプに分けて説明されることが多い。例えば、田中／松平「ギリシャ語入門　改訂版」においては、（イ）ある事が事実起こりうるかは問題とせずに想定する場合、（ロ）結局は起こるかも知れぬという予想のもとに想定する（場合）、（ハ）単に可能的な場合として考える（場合）、（ニ）そのことが繰り返されるごとに同じ結果になる、という普遍的な事実又は真理を述べる場合、（ホ）現在又は過去において事実起こらなかったこと、起こらないことを、かりに起こった、または起こるとして仮定する場合、と説明され、それぞれのケースで「動詞の時称や法がいろいろに組み合わされて用いられる」ことが説かれる。（文献３, P.93）

そして、「もしお前がそれをしているなら、それは結構だ」のような例文でそれらの相違が示される。このうち、（ホ）のケースは比較的わかりやすいが、（イ）、（ロ）、（ハ）、（ニ）の区別は、コンテクストを欠いた短い例文では（筆者を含めた）初学者にはなかなかその区別がわかりにくい。そこで本稿では、条件文の分類の問題を考察し、次に、具体例をプラトンの「ソクラテスの弁明」のコンテクストの中で検証しようとするものである。

一、条件文の分類について

まず、本稿で扱う「条件文」（conditional sentences, Konditionalsätze）とは、εἰ によって導かれる前文（protasis）と後文（apodosis）を備えたものを指し、副詞、分詞によるものなど、これ以外の要素によるものは考察の対象としていない。また用語としては、前文が条件を表すのでこれを条件文ということもあるが、本稿でいう「条件文」は前文と後文をあわせた一文全体のことである。また前文は「仮定部」または「条件節」の語を、後文については「帰結部」という語も用いる。

いくつかのの文法書を概観すると条件文の分類や説明には多少の相違が見られるが、大別すると、１．（上記の例ように）条件の実現性の相違によるもの（ドイツ、フランスの文法書に多い。文献５～10）、２．条件と帰結の実現の時を基本とするもの（英語による文法書２例。文献 11，12））である。

１．メンゲ等の分類

上記（ィ）から（ホ）に相当すると思われるものをすべて挙げている典型的な例として、ヘルマン・メンゲ Hermann Menge の分類を掲げる（文献５、p. 201）。（ただし順序は上記にそって変え、また適宜、用語の和訳などを補った）

Nebensatz 副文 (protasis)	Hauptsatz 主文 (apodosis)	分類	田中文法 との対応
εἰ + Indikativ 全時称	Indikativ 全時称	Realis	イ
ἐάν + Konjunktiv	Ind. Futur, Imperativ	Eventualis	ロ
εἰ + Optativ	Optativ + ἄν	Potentialis	ハ
ἐάν + Konjunktiv εἰ + Opt.	Ind. Präs., Ind. Perf. Ind. Imperfekt	Iterativus 現在 Iterativus 過去	ニ
εἰ + Ind. Imperfekt, εἰ + Ind. Aorist	Ind. Imperfekt, Ind. Aor. + ἄν	Irrealis	ホ

一方、ケーギ Adolf Kaege はやや原理的な考え方によって異なる分類を提示する（6, p. 150-155）。ケーギ の分類で特徴的なことは、まず全体をⅠ Indefinitus, Ⅱ Definitus という概念で大別することである。この区別のの基準は、「条件節が現実とどのような関係をもつと話者が想定するか」にあるとする。その際の第Ⅰのケースは、「話者が、条件節と現実との関係を不定（indefinit）にしておく」場合であり（Indefinitus）、第Ⅱのケースは「話者が、条件節と現実の関係をどのように想定しようとしているか、を（不定とせずに）表わす」場合（Definitus）であると明快に説明する（Der sprechende deutet an, welches Verhältnis des bedingenden Satzes zur Wirklichkeit er annahmen will）。

Ⅱ Definitus はさらに次の２つに分類される。a. 条件節の内容をありうると考えようとしていることを表わすケース（Potentialis）。b. 条件節の内容の実現性はないと考えているケース（Irrealis. これはさらに、現在と過去の２つに別れる）。

彼の説明を表示すると次のようになる。

	protasis	apodosis
Ⅰ Indefinitus 未来のときは	εἰ + Ind. εἰ + Ind. Fut. およびしばしば ἐάν + Konj.Präs./Aor	Ind.
Ⅱ Definitus a) Potentialis	εἰ + Opt.	Opt. + ἄν
b) Irrealis 現在 過去	εἰ + Ind. Impf. εἰ + Ind. Aor.	Ind. Impf. + ἄν Ind. Aor. + ἄν

メンゲ等が用いるRealisとEventualisの概念は、この分類の中ではIndefinitusに含まれるであろう。しかしケーギはRealisの呼称をはっきりと退けており（falsche Bezeichnung）（§179, Anm.）、またEventualisも未来のIndefinitusの一部にすぎないとしてこれを用いない。またIterativusも一般の条件文に含めず、仮定ではなく反復を表す条件文（iterative Bedingungssätze）として別の範疇で扱っている。（§185．また文献7 Ars Graecaも同様。p. 233）

このような分類を示した上でさらにケーギは、実際の現れはこのように一様ではなく混在して現れると断り、その理由として「ギリシャ人の柔軟な精神」（der bewegliche Geist des Hellenen）や、話者の立場が変化すること（Wechsel des Standpunktes）をあげる（§184 , p. 152〜3）。

次にシュヴィーツァーEduard Schwytzerの分類にも目を投じておきたい。彼は基本的には　1. realer Fall, 2. eventueller Fall, 3. potentialer Fall, 4. irrealer Fallという分類をとるが、それぞれの話法の使われ方は決して上記のように一様ではないことを強調する。「ここでは非常に多様なケースが生ずる。言葉はまさしく、通常文法（Normalgrammatik）の4つの型が推測させるよりもはるかに自由である。」（p. 683-4）　記述にあたっても詳細を極めて遺漏がない。彼もまた、Iterativusはこの範疇では扱っていない。

またキューナーRaphael Kühner（文献9）は、ラテン語とギリシャ語のそれぞれに浩瀚な文法書があり、多くの用例を駆使した詳細な説明には驚嘆させられる。詳細は省くが、分類は基本的には同様であると言ってよい。帰結文において様々なケースがあることを、それぞれのニュアンスの違いを詳細に記述している点で参考になる。

2．スミス、グッドウィンの分類

			protasis	apodosis
Present/ Past	Ⅰ simple	a) chiefly particular	εἰ + ind. any form	ind. any form
		b) general	ἐάν + subj. εἰ + opt.	pres.ind. or equivalent
	Ⅱ unreal		εἰ + impf. ind. εἰ + aor./impf. ind.	impf. ind. or equiv.
Future	Ⅲ more vivid		ἐάν + subj.	fut. ind. or equivalent
	Ⅳ less vivid		εἰ + opt.	ἄν + opt.
	emotional*		εἰ + fut. ind.	fut. ind. or equivalent

（＊表中、未来のemotionalというカテゴリーはグッドウィンにはない。）

スミス Herbert W. Smyth とグッドウィン William W. Goodwin の記述 はほぼ共通しており、分類の提示がこれまで述べてきたものとは異なっている。いま主としてスミスによって示すと、条件文の機能、意味による分類の原理として３つの要素が挙げられる。１，現在／過去の条件か、未来の条件か、２ , 実現されるかされないか、３，個別的か一般的か、という要素がそれである。そして、個々のケースにRealisなどの分類上の名称をあてない。スミスの示す表をもとに、二人の説明をまとめると上表のようになるであろう。

二、「弁明」に見る条件文

上記の分類を念頭に、プラトンの「ソクラテスの弁明」における諸例を検討する。分類はメンゲの用語を踏襲する。このうち、IterativusとIrrealisは比較的異論なく理解されると思われるので、本稿では主としてRealis, Eventualis, Potentialisに重点を置いてその使用法と意味を考察したい。

（一）Realis

例１　（プラトンの）ソクラテスは、弁明を行うにあたって、まず第一に、長年にわたって自分になされてきた中傷に対して論駁することから始める。そして結論として「しかしこの私はそれらのことについては、多かれ少なかれ全く心得てはいないのである」として次のように言う。

> ともかく、実際、それらのことは何一つ存しないばかりか、、また私が人間を教育することを企て、金銭を要求するということを（諸君が）誰かから聞いているなら、そのこともまた本当ではないのである。（四章、19d-e）（下線筆者、以下同様）

原文は以下のようであって、これはRealisの要件を備えている。

> ἀλλὰ γὰρ οὔτε τούτων οὐδέν ἐστιν, οὐδέ γ’ εἴ τινος ἀκηκόατε ὡς ἐγὼ παιδεύειν ἐπιχειρῶ ἀνθρώπους καὶ χρήματα πράττομαι, οὐδὲ τοῦτο ἀληθές.

protasis	apodosis	分類
εἰ + Ind. (**ἀκηκόατε**)	(ind. ἐστιν)*	Realis

＊文末に、前文からἐστινを補う。これがapodosisの定動詞である。(17, p. 53等による)

ソクラテス自身、彼についてのそのような噂が広められていることは十分に承知しており、この場合の「聞いているなら」という仮定は、実際にはもうたてるる必要がない

はずである。つまりこの仮定は、事実確認の言い換えである。「条件は事実上みたされていると考えて、単にこれを一つの条件として提出するにすぎない」（高津、p. 399）という説明が最も当を得ているように思われる。表現を変えれば、‘the question of fulfilment has already been decided, but we may or may not wish to imply by our form of statement how this has been decided.’ (13, p. 139) 。この、仮定と帰結の体裁をとった文は、「諸君が聞いていることは本当ではない」という命題と等価であると考えられる。

文法構成上の当該部分の英訳：

But in fact none of these things are true, and if you have heard from anyone that I undertake to teach people and that I make money by it, that is not true either.

例２　前後するが、上例に先行する、古い告訴への弁明を始める部分。

では、私に対する中傷が生じるもとになった告訴が何であるか、最初からそれを取り上げてみよう、きっとこの中傷を信じてメレトスは私に対しこの公訴状を書いたのだろうから。さて、それでは、いったい何を言いながら中傷者たちは中傷するのを常としたか。今、彼らを告訴者たちと見たてて、その宣誓口述書を読みあげなければならない。「ソクラテスは地下のことや天上のことを探究し、また負けめの言論を勝ちめの言論となし、かつその同じことを他の人々に教える点で罪があり、よけいなことをするものである」何かこのようなものである。実際、これらのことは、諸君もアリストパネスの喜劇の中で見て知っているのである、そこではソクラテスという者が運び回られて空中を歩くと称したり、その他多くのくだらぬことをしゃべっているからである。しかしこの私はそれらのことについては、多かれ少なかれ全く心得てはいないのである。そしてこう私が言うのは、もし誰かそのようなことについての知者がいるなら、そのような種類の知識を軽蔑するつもりからではない、（中略）そうではなくて、じつは、アテナイ人諸君、それらのことは少しも私にかかわりがないからなのである。（三章、19b-c）

下線部分の原文は次の通りである。

…καὶ οὐχ ὡς ἀτιμάζων λέγω τὴν τοιαύτην ἐπιστήμην, εἴ τις περὶ τῶν τοιούυων σοφός ἐστιν.

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**ἐστιν**) ind.	(**λέγω**) ind.	Realis

クセノフォンは「ソクラテスの思い出」の中で、ソクラテスが「『万有の性質』につ

いても、他の多くの人々のようにこれを論議することを欲せず、学者輩のいわゆる「宇宙（コスモス）」の性質を問うたり、個々の天界現象を支配する必然をたずねたりすることなく、かえってこうした問題を詮索する人間の言語道断を指摘した」ことを伝えている（1,1,11）（19, p.26）。ソクラテスが「そのようなことについての知者がいる」ことには大いに疑念を持っていることは明らかである。しかしこの文は Realis で言われている。条件が満たされるか否か、つまり、そのようなことについての知者がいるかいないかは不問に付す態度であるから、アイロニカルなニュアンスも生じることになると思われる。Louis Dyer は “the expression of the condition implies a doubt, though it is in the logical form.” と註する。（16, p. 46）

例３　「弁明」の末尾近く、自分を有罪とした者たちに向かってソクラテスは語る。

> つまり諸君を吟味する者たちは、もっとたくさんになるだろう、彼らを今まで私は抑えていたから、諸君は彼らに気づいていなかったが。そして彼らは私より若いだけに、それだけいっそうひどいだろう、そして諸君はいっそう不快を覚えるだろう。というのはもし諸君が人間どもを殺すことによって、諸君の生き方は正しくない、と人が諸君に向かって非難するのを押しとどめることができるだろうと思うなら、諸君の考えは立派でないからである。なぜならそういう仕方でのがれるのは決してたやすくできることでもなければ、立派なことでもなくて、むしろあの仕方で、つまり他の人々を抑えつけることではなくて、自分自身をできるだけ優れたものになるように、ととのえるという仕方でのがれるのがいちばん立派なことでもあり、いちばん容易なことでもあるからである。ともかく以上のことを、有罪と判決した諸君に予言して、私はお別れする。（三十章、39, d）

下線部の仮定も形式的なもので、ソクラテスを有罪とした者たちが、彼を亡き者にすることによって人々の「非難するのを押しとどめることができるだろうと思」っていることはすでに話者（ソクラテス）の確信するところである。思うか思わないか、を真に問題にするわけではない。このケースも Realis となることが予想される。

下線部分の原文とその文型。

εἰ γὰρ <u>οἴεσθε</u> ἀποκτείνοντες ἀνθρώπους ἐπισχήσειν τοῦ ὀνειδίζειν τινὰ ὑμῖν ὅτι οὐκ ὀρθῶς ζῆτε, οὐ καλῶς <u>διανοεῖσθε</u>·

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**οἴεσθε**) ind.	(**διανοεῖσθε**) ind.	Realis

英訳：

For if you think that by putting men to death you will prevent anyone from reproaching you because you do not act as you should, you are mistaken.

以上の例からRealisは、その仮定部は真の仮定ではなく、ある命題を仮定と帰結の形に変えて表すものであると言うことができる。

（二）Eventualis

まず上記Realisと対比する意味で、次の例をみる。

例4

しかし私が（何か人間のおよびもつかないほどの知恵に関して－筆者）知っていると言う者は誰でも嘘をついているのであって、私を中傷するために、そう言うのである。そしてどうか、アテナイ人諸君、私が何か大きなことを言うように諸君に思われても、騒ぎ立てて話の邪魔をしないでもらいたい。というのは私がたとえ何を言おうとも、これから私の言おうとするそのことばは私のものではなくて、むしろ諸君の信頼に値する者がちょうどそれを言った者で、この者から出てきたのであるから。つまり、私のが、はたして一種の知恵であるなら、その知恵について、またそれがどのようなものであるかについてその証人として私が提供しようとするのは、デルポイにいます神なのである。（五章、20e）

はじめの条件文は、近未来において十分に予想される事態に際しての、依頼の文である。スミスが ‘future, more vivid’ とするケースであり、上記Realisが条件の実現性を問題としないのとは異なる。文法上もEventualisの要件を備えている。

他方、後者の条件文では、ソクラテスは自分の抱くものが知恵であることは確信しており、この部分も仮定と帰結の体裁はとっているが、「私の知恵の証人はデルポイの神である」という命題の言い換えである。従ってこれは上述のRealisとなる。

当該部分の原文は、

...καί μοι, ὦ ἄνδρες ’Αθηναῖοι, μὴ θορυβήσητε, μηδ’ ἐὰν δόξω τι ὑμῖν μέγα λέγειν· οὐ γὰρ ἐμὸν ἐρῶ τὸν λόγον ὃν ἂν λέγω, ἀλλ’ εἰς ἀξιόχρεων ὑμῖν τὸν λέγοντα ἀνοίσω τῆς γὰρ ἐμῆς, εἰ δή τίς ἐστιν σοφία καὶ οἵα, μάρτυρα ὑμῖν παρέξομαι τὸν θεὸν τὸν ἐν Δελφοῖς.

protasis	apodosis	分類
ἐάν + (**δόξω**) subj.	(**θορυβήσητε**) subjunctive*	Eventualis
εἰ + (**ἐστιν**) ind.	(**παρέξομαι**) ind. future	Realis

＊実質的に否定のimperative

英訳：

and whoever says I do, is lying and speaking to arouse prejudice against me. And, men of Athens, do not interrupt me with noise, even if I seem to you to be boasting; for the word which I speak is not mine, but the speaker to whom I shall refer it is a person of weight. For of my wisdom—if it is wisdom at all—and of its nature, I will offer you the god of Delphi as a witness.

例5　「弁明」の中で、Eventualisは比較的多く見いだされるが、裁判の進行の中で聴衆（陪審員たち）に語りかけ、つねにその反応を計算に入れつつ語っていくというテクストの性質上、自然のことであるかもしれない。

そして諸君のうちの誰一人私が本当とは違ったことを話すだろうと期待してはいけない。（略）そこでまた、アテナイ人諸君、諸君にぜひともお願いして許しを得ておきたいことが、ここにある。それは、私が市場の両替屋のテーブルのところで――そこで諸君の多くがすでに聞いたことがあるのだが、それからまた他のところで、私が話すのに、いつも使っているのと全く同じことばによって私が弁明するのを聞くなら、そのことのために諸君が驚いたり、騒いで邪魔したりしないことである。（一章、17c-d）

原文は「そこでまた」以下を示す。

…καὶ μέντοι καὶ πάνυ, ὦ ἄνδρες ᾽Αθηναῖοι, τοῦτο ὑμῶν δέομαι καὶ παρίεμαι· ἐὰν διὰ τῶν αὐτῶν λόγων ἀκούητέ μου ἀπολογουμένου δι᾽ ὧνπερ εἴωθα λέγειν καὶ ἐν ἀγορᾷ ἐπὶ τῶν τραπεζῶν, ἵνα ὑμῶν πολλοὶ ἀκηκόασι, καὶ ἄλλοθι, μήτε θαυμάζειν μήτε θορυβεῖν

protasis	apodosis	分類
ἐάν + (**ἀκούητέ**) subj.	(**δέομαι καὶ παρίεμαι** + inf.) ≒ imperative	Eventualis

英訳：

And, men of Athens, I urgently beg and beseech you if you hear me making my defence with the same words with which I have been accustomed to speak both in the market place at the bankers tables, where many of you have heard me, and elsewhere, not to be surprised or to make a disturbance on this account.

例6　「未来」はさらに遠い未来のケースもある。自分の処刑後に残される二人の息子

たちの行く末について、告訴者たちへの痛烈な皮肉をこめて語るソクラテス。

けれども彼ら（私を有罪とした人々、筆者）には次のことをお願いしておく。すなわち私の息子たちが成年に達した暁には、諸君は彼らに復讐して、私が諸君を苦しめてきたのとちょうど同じことで苦しめていただきたい、つまり、もし諸君に彼らが徳のことよりも先にお金のことや何かその他のことを心掛けているように思われるなら、また少しもそうでないのに、ひとかどの者であると彼らが思うなら、私が諸君に対してしたと同様に、彼らを非難して、心掛けねばならぬことを心掛げず、また取るに足らぬ者であるのに、ひとかどの者であると思っている、と言ってやっていただきたい。そしてもし諸君がそれをしてくれるなら、私は諸君によって私自身のみならず、息子たちまでも正当な取扱いを受けたことになるだろう。（三十三章、41e）

τοσόνδε μέντοι αὐτῶν δέομαι· τοὺς ὑεῖς μου, ἐπειδὰν ἡβήσωσι, τιμωρήσασθε, ὦ ἄνδρες, ταὐτὰ ταῦτα λυποῦντες ἅπερ ἐγὼ ὑμᾶς ἐλύπουν, ἐὰν ὑμῖν δοκῶσιν ἢ χρημάτων ἢ ἄλλου του πρότερον ἐπιμελεῖσθαι ἢ ἀρετῆς, καὶ ἐὰν δοκῶσί τι εἶναι μηδὲν ὄντες, ὀνειδίζετε αὐτοῖς ὥσπερ ἐγὼ ὑμῖν, ὅτι οὐκ ἐπιμελοῦνται ὧν δεῖ, καὶ οἴονταί τι εἶναι ὄντες οὐδενὸς ἄξιοι. καὶ ἐὰν ταῦτα ποιῆτε, δίκαια πεπονθὼς ἐγὼ ἔσομαι ὑφ᾽ ὑμῶν αὐτός τε καὶ οἱ ὑεῖς.

protasis	apodosis	分類
ἐὰν + (**δοκῶσιν**) subj. **ἐὰν** + (**ποιῆτε**) subj.	(**τιμωρήσασθε**) imperative (**ἔσομαι**) ind. future	Eventualis Eventualis

英訳：

However, I make this request of them: when my sons grow up, gentlemen, punish them by troubling them as I have troubled you; if they seem to you to care for money or anything else more than for virtue, and if they think they amount to something when they do not, rebuke them as I have rebuked you because they do not care for what they ought, and think they amount to something when they are worth nothing. If you do this, both I and my sons shall have received just treatment from you.

自分の処刑後にあとに残される二人の息子の行く末について託すとき、文は more vivid future として Eventualis になっている。

以上の例から、Eventualis は、事態の推移が、近未来のこととして具体的に予想され

る、という文脈で使用される、ということができる。

（三）Potentialis

Potentialis は、ケーギの説明では、話者が条件（仮定）を立てる際に、条件の実現はありうると考えようとしていることを表わすケース、である。しかし一方で、「（仮定文の法として希求法が使われ）接続法の場合よりも、さらに漠然とした、実現の可能性の少ない未来の仮定」（4, §310, 3,b、p.401）であるとも説明される。スミスの分類も、未来の less vivid な条件とする。

例 7

> ・・だから私は、アテナイ人諸君、恐るべきことをしでかした者だということになろう、もし諸君が私を支配するために選挙した上官たちがポテイダイアでもアムピポリスでもデリオンでも持場に配したそのときには、かの人たちが配したその持場に、多くの人々と同様に、留って死の危険をおかしたものだったのに、私の考え、解しているところでは、神様が持場に配して、私は哲学をし、自分自身と他の人々とを取調べながら生きねばならぬと命じられたときには、そこで死、あるいは他の何ごとかを恐れてその持場を見捨てるとすれば、それは本当に恐るべきことであろう。そてして本当にそのときこそ人は私を裁判所へ正当な理由をもって引出すことができるだろう、というのは死を恐れて、知者でないのに、知者だと思うところから、神託に服従しないので、私は神々のあることを信じないことになるからである。（十七章、28e）

ソクラテスは、神によって定められた持ち場を自分が見捨てることがあろうとは、もちろん微塵も思ってはいない。したがってこの場合の仮定は、その可能性がまったくないか、あるいはあったとしてもごくわずかであると話者が確信しつつたてているものである。「条件が実現する可能性はあるとされる」というケーギ等の説明は、「一応可能性としてはあるが、それはあくまで机上の仮定としてである」という意味に解すべきである。

> ἐγὼ οὖν δεινὰ ἂν εἴην εἰργασμένος, ὦ ἄνδρες ᾽Αθηναῖοι, εἰ ὅτε μέν με οἱ ἄρχοντες ἔταττον, οὓς ὑμεῖς εἵλεσθε ἄρχειν μου, καὶ ἐν Ποτειδαίᾳ καὶ ἐν ᾽Αμφιπόλει καὶ ἐπὶ Δηλίῳ, τότε μὲν οὗ ἐκεῖνοι ἔταττον ἔμενον ὥσπερ καὶ ἄλλος τις καὶ ἐκινδύνευον ἀποθανεῖν, τοῦ δὲ θεοῦ τάττοντος, ὡς ἐγὼ ᾠήθην τε καὶ ὑπέλαβον, φιλοσοφοῦντά με δεῖν ζῆν καὶ ἐξετάζοντα ἐμαυτὸν καὶ τοὺς ἄλλους, ἐνταῦθα δὲ φοβηθεὶς ἢ θάνατον ἢ ἄλλ᾽ ὁτιοῦν πρᾶγμα λίποιμι τὴν τάξιν. δεινὸν

τἂν εἴη, καὶ ὡς ἀληθῶς τότ' ἄν με δικαίως εἰσάγοι τις εἰς δικαστήριον, ὅτι οὐ νομίζω θεοὺς εἶναι ἀπειθῶν τῇ μαντείᾳ καὶ δεδιὼς θάνατον καὶ οἰόμενος σοφὸς εἶναι οὐκ ὤν. τὸ γάρ τοι θάνατον δεδιέναι, ὦ ἄνδρες, οὐδὲν ἄλλο ἐστὶν ἢ δοκεῖν σοφὸν εἶναι μὴ ὄντα·

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**λἰποιμι**) subj.	ἂν (**εἴην**) opt. τἂν + (**εἴη**) opt. ἂν (**εἰσάγοι**) opt.	Potentialis

（帰結文の動詞部　ἂν εἴην は冒頭で一度言われ、またのちに繰り返されている。）

英訳は構文的要素のみを挙げる。

So I should have done a terrible thing, if, ..., then I were to desert my post through fear of death or anything else whatsoever. It would be a terrible thing, and truly one might then justly hale me into court, ...

可能性があったとしても極小であれば、Irrealis に近くなり、「irrealis と potentialis とのどちらともとれる場合もある」ことになる（4, §310, 3,b. p. 402）。事実、帰結部の話法的構成は同一である。異なるのは、仮定が現在・過去に属するか、未来に属するかという点である。

例８　仮定と帰結を、可能性の少ないこととして表すことは、修辞的には謙譲の表現ともなりうる。ソクラテス（プラトン）はこの語法も駆使して弁論を展開する。

なぜなら実際、死を恐れるということは、諸君、知者でないのに、知者だと思うことにほかならないからである。それは知っていないことを知っていると思うことであるから。というのは誰も死が、人間にとって、もしかしてすべての善のうちで最大のものであるのではないか、そのことさえ知っていないのに、それが悪のうちで最大のものであるということをよく知っているかのように恐れるからである。けれどもどうしてそれがあの最も非難すべき無知、つまり、知っていないことを知っていると思う、無知でないことがあろうか。しかし私は、諸君、このことでこの場合にも多くの人々からおそらく優れているだろう、そてしてもし実際に何かで人よりも、知者であると言い得るとすれば、それはこのこと、つまり、黄泉の国のことについては充分には知っていないので、またそのように知っていない、と思っているという、そのことによってであろう。

（十七章、29b）

原文は当該部分のみを示す。

…καὶ εἰ δή τῳ σοφώτερός του φαίην εἶναι, τούτῳ ἄν, ὅτι οὐκ εἰδὼς ἱκανῶς περὶ τῶν ἐν Ἅιδου οὕτω καὶ οἴομαι οὐκ εἰδέναι·

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**φαίην**) opt.	ἄν + (**φαίην**) *opt.	Potentialis

*φαίην σοφώτερος εἶναι を　* Weber, p.92. によって補う。

Apodosisの動詞部分は省略されているが、上記のように希求法で補いうることは、ἄνの存在からあきらかである。文型は典型的なPotentialisとなる。自分が「実際に何かで人より, も、知者であると言い得る」ことについては、ソクラテスはこの場合十分に自信をもっているが、それは「言いうるとすれば」と希求法で控えめに表現される。さらに、Louis Dyerによれば、ソクラテスはこの謙譲さを動詞の省略によって二重に強調する、という。（16, p. 77）

当該文の英訳：

…and if I were to say that I am wiser in anything, it would be in this, that not knowing very much about the other world, I do not think I know.

例9　Potentialisが形態面では別の形をとっている例もある。四章の始めの部分でソクラテスは、自分が金銭を取って教えているなどの非難がなされていることについて、次のように述べる。（比較のため、前半は例1と重複）。

ともかく、実際、それらのことは何一つ存しないばかりか、また私が人間を教育することを企て、金銭を要求するということを誰かから聞いているなら、そのこともまた本当ではないのである。もっとも、レオソチノイのゴルギアスやケオスのプロヂコスやエリスのヒッピアスのように、誰かが人間を教育することができるなら、そのことも結構なことだと私には思われるのだが。というのはこれらの人々はいずれも、なんと、諸君、いずれの国へ行っても青年たちを彼らには自分の国の人々のうちに、自分が交際したいと思う人があれば、誰とでもただでそうすることができるのに、この青年たちを説得してその国の人々との交際を見捨てさせたうえ、金銭を支払い、おまけに感謝までして自分たちと交際するようにすることができるのである。（四章、19c-e）

当該部分の原文。

…ἀλλὰ γὰρ οὔτε τούτων οὐδέν ἐστιν, οὐδέ γ' εἴ τινος ἀκηκόατε ὡς ἐγὼ παιδεύειν ἐπιχειρῶ ἀνθρώπους καὶ χρήματα πράττομαι, οὐδὲ τοῦτο ἀληθές. ἐπεὶ καὶ τοῦτό γέ μοι δοκεῖ καλὸν εἶναι, εἴ τις οἷός τ' εἴη παιδεύειν ἀνθρώπους ὥσπερ Γοργίας τε ὁ Λεοντῖνος καὶ Πρόδικος ὁ Κεῖος καὶ Ἱππίας ὁ Ἠλεῖος.

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**ἀκηκόατε**) ind.	ind. （注：前文から**ἐστιν**を補う）	Realis
εἰ + (**εἴη**) opt.	(**δοκεῖ**) ind. = ἄν εἴη *	(Potentialis)

* 下記記述を参照。

「本当ではない」の文は、仮定と帰結の体裁になっているが、実質は「諸君が聞いていることは本当ではない」と等価であって、一種の命題に等しいことは上述した（Realis）。それに対して、「結構なことだと・・思われるのだが」の文は、形態的にはどの型とも決めることができない。ところが、Louis Dyer は 'the regular apodosis καλὸν ἄν εἴη is represented by its equvalent in sens, δοκεῖ καλὸν εἶναι' と註する（16, p.47）。この文が実質的に Potentialis ならば、「誰かが人間を教育することができる」ことに対しては、ソクラテスがそれを極めて可能性の少ないこととして懐疑的に見ていることが読みとれることになる。

英訳は文法的関連箇所のみをあげる。

… and if you have heard from anyone that I undertake to teach people and that I make money by it, that is not true either. Although this also seems to me to be a fine thing, if one might be able to teach people, as Gorgias of Leontini and Prodicus of Ceos and Hippias of Elis are.…

例 10　他の文型との混在の例。ソクラテスが、息子のために家庭教師を雇ったある男に尋ねる。

そのような徳、すなわち、人間とし国民としての徳の識者とは誰であるか。こうたずねるのは君は息子を持っていることだから、もうよく調べていると思うからだよ。誰かいるかね、それとも、いないかね」と私は言った。「ええ、いますとも」と彼は言った。「誰だ、そしてどこの者で、いくらで教えるのだ」と私は言った。「エゥエノスですよ」と彼は言った。「ソクラテス、パロスの者で、五ムナです」。そこで私はもし彼が本当にその術を持っているものなら、そしてこんなにもころ合いの値段で教えるのなら、エウエノスは幸せな男だと私は思った。

（四章、20b-c）

原文は文法構成上の当該部分のみを示す。

καὶ ἐγὼ τὸν Εὔηνον ἐμακάρισα, εἰ ὡς ἀληθῶς ἔχοι ταύτην τὴν τέχνην καὶ οὕτως ἐμμελῶς διδάσκει.

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**ἔχοι**) opt. εἰ + (**διδάσκει**) ind.	(**ἐμακάρισα**) ind.	Potentialis, Realis

ここでは、protasis の定動詞は「本当にその術を持っている」と「教える」を、前者は希求法、後者は直説法で表しており、話者がそれらの認識に寄せる微妙な距離の違いが感じられる。つまり、ある人が本当にそういう術（教育の）を持っている、ことに対しては疑わしい気持ちを持っているが、しかし５ムナという額で教えていることは動かしがたい事実と受け取っていることが表れている。訳文も一方は「持っているものなら」、他方は「教えるのなら」とこの差異を巧みに表しているように思われる。

ただし、帰結部については問題が残る。通常の Potentialis のように ἄν + opt. で終わらずに、直説法を取っており、後述する混交の例となる。

英訳：And I called Evenus blessed, if he really had this art and taught so reasonably.

（四）Iterativus

Iterativus は「もし・・なら、・・するのを常とする／した」という反復の意味を表し、スミス、グッドウィン等の「現在／過去の 一般的な仮定」に相当するものである。しかし考え方によってはその前提部は真の意味の仮定というようりは、反復の条件を表す時の文(Temporalsätze) に近い。この意味でケーギ等は一般の条件文としては扱わないことは上述した。

例 11

こういう次第でこの取調べから、アテナイ人諸君、多くの、しかもきわめて始末の悪い荷厄介な性質の嫌悪が私に対して生じてきて、その結果それから多くの中傷が生じてくることになったが、しかしまた私はこの知者という名前で呼ばれることになったのである。（中略）けれども、諸君、実際のところは、神様が知者であって、（中略）だからそのために私は今でもなお神様の命令により、歩き回って、この国の人々のうちにせよ、他国の人々のうちにせよ、誰か知者だと私の思う人があれば、その人を捜して調べているのである。そして私にそうでないと思われると、そのときには、神様のお手伝いをしながら、知者ではないということ

を示してやるのである。（九章、23a-b）

文法構成上の当該部分の原文：

ταῦτ᾽ οὖν ἐγὼ μὲν ἔτι καὶ νῦν περιιὼν ζητῶ καὶ ἐρευνῶ κατὰ τὸν θεὸν καὶ τῶν ἀστῶν καὶ ξένων ἄν τινα οἴωμαι σοφὸν εἶναι· καὶ ἐπειδάν μοι μὴ δοκῇ, τῷ θεῷ βοηθῶν ἐνδείκνυμαι ὅτι οὐκ ἔστι σοφός.

protasis	apodosis	分類
ἄν (= ἐάν) + (**οἴωμαι**) subj. **ἐπειδάν** + (**δοκῇ**) subj.	(**ζητῶ καὶ ἐρευνῶ**) ind.	Iterativus

Iterativus で語られることによって、「もしそのような人がいれば機会をのがさずに」というニュアンスが表わされることになる。

例12　古代ギリシャの裁判では、被告が身内のものを加勢にたてて懇願させ、同情をかうことによって罪の軽減を願うことがあったようである。ソクラテスはそれを潔しとせず、手段を選ばず死を逃れようとすることについて述べる。

というのは法廷においても戦場においても、私にせよ他の人にせよ、人は、なんとしてでも死をのがれようと工夫してはならないからである。そして実際戦闘においてしばしば目につくことだが、死することだけなら、人は武器も投げ捨て、追手の情にもすがることによって免れることはできるだろう、その他どんな危険においても、もし人があえてどんなことでもしたり言ったりするとすれば、死をのがれるための手段はたくさんある。ともかく、諸君、このことは、つまり死を免れることはむずかしいことじゃないのではなかろうか。（二十九章、38e-39a）

οὔτε γὰρ ἐν δίκῃ οὔτ᾽ ἐν πολέμῳ οὔτ᾽ ἐμὲ οὔτ᾽ ἄλλον οὐδένα δεῖ τοῦτο μηχανᾶσθαι, ὅπως ἀποφεύξεται πᾶν ποιῶν θάνατον. καὶ γὰρ ἐν ταῖς μάχαις πολλάκις δῆλον γίγνεται ὅτι τό γε ἀποθανεῖν ἄν τις ἐκφύγοι καὶ ὅπλα ἀφεὶς καὶ ἐφ᾽ ἱκετείαν τραπόμενος τῶν διωκόντων· καὶ ἄλλαι μηχαναὶ πολλαί εἰσιν ἐν ἑκάστοις τοῖς κινδύνοις ὥστε διαφεύγειν θάνατον, ἐάν τις τολμᾷ πᾶν ποιεῖν καὶ λέγειν. ἀλλὰ μὴ οὐ τοῦτ᾽ ᾖ χαλεπον, ὦ ἄνδρες, θάνατον ἐκφυγεῖν, ἀλλὰ πολὺ χαλεπώτερον πονηρίαν·

protasis	apodosis	分類
ἐάν + (**τολμᾷ**) subj.	(**εἰσιν**) ind.	Iterativus 現在

この日本語訳、英訳からも「反復」のニュアンスを感じ取ることはむつかしいが、文型上 Iterativus であり、「死をのがれるための手段はたくさんある」のが常である、というニュアンスを感じとるべきなのであろう。事実上これは「現在の一般的な条件」(4, §310, 2,a. および上記スミスの表）と考えてもよいケースと思われる。

> For neither in the court nor in war ought or any other man to plan to escape death by every possible means. In battles it is often plain that a man might avoid death by throwing down his arms and begging mercy of his pursuers; and there are many other means of escaping death in dangers of various kinds if one is willing to do and say anything.

（五）Irrealis

これについては多言を要しないと思われるが、弁論上は重要な修辞法であることはもちろんである。多くの例が見られるが、冒頭から1例のみをあげる。

例 13

> ・・というのはこういう次第だからである。今日はじめて私は裁判所へ出頭しているのである。七十才にもなるのに。だからここでの言葉使いにはもう全く他国人のようなものである。ところで、もし私が他国人であったなら、私が育てあげられたその国の方言と、その痩い方とで話をしても、きっと私は許してもらえることだろう。だからそのように今も諸君にこれを当然なこととしてお願いするように私には思われるのである。これと言うのは言葉の使い方（中略）のほうは大目に見て、私が正しいことを言っているか、いないか、ちょうどこの点をよく見、またそれに心を向げることなのである。（一章、17d-18a）

> ἔχει γὰρ οὑτωσί. νῦν ἐγὼ πρῶτον ἐπὶ δικαστήριον ἀναβέβηκα, ἔτη γεγονὼς ἑβδομήκοντα· ἀτεχνῶς οὖν ξένως ἔχω τῆς ἐνθάδε λέξεως. ὥσπερ οὖν ἄν, εἰ τῷ ὄντι ξένος ἐτύγχανον ὤν, συνεγιγνώσκετε δήπου ἄν μοι εἰ ἐν ἐκείνῃ τῇ φωνῇ τε καὶ τῷ τρόπῳ ἔλεγον ἐν οἷσπερ ἐτεθράμμην, …

protasis	apodosis	分類
εἰ + (**ἐτύγχανον**) ind. impf.	ἄν + (**συνεγιγνώσκετε**) ind. impf.	Iterativus

（六）混交の例

以上で、仮定と帰結が「学校文法的」分類の図式に一応あてはまるものを考察した。しかしそこでもすでに多少のズレが見られるケースがあった。上記ケーギやシュヴィーツァーの言をまつまでもなく、言葉の使用は多様であり、いくつかの例で、仮定と帰結

の法が交差して用いられているものが見られる。もっとも目につくのが、Realis と Potentialis の混交の様相を呈するものである。すなわち、仮定部は εἰ + indicative であるが、帰結部が直説法でなく optative + ἄν になっているものである。もちろん比較的詳細な文法では、この現象にも十分言及している。(11, §2335, p.534 等)

例 14　冒頭から。

アテナイ人諸君、諸君が私の告訴者たちのせいで、どんな心持になっているか、それは知らない。しかしともかく私は彼らのおかげで私自身さえもが少しのところで私自身を忘れるくらいだった。それほど説得的に彼らは語った。けれども本当のことは、いわば、何一つ言っていないのである。しかし彼らに関して私の特に驚いたのは、彼らがついた多くの嘘の一つである、それは私が弁舌の巧みな者ででもあるかのように、私によってだまされないように諸君は用心しなければならぬ、と彼らが言った箇所である。すなわち、どうにもこうにも私が弁舌の巧みな者とは見えないときには、事実をもってただちに私から反駁されることになるだろうが、それを恥じないという、このことこそ彼らにおいて最も無恥な点だと私に思われたのである、もっともこの人たちが本当のことを語る者を弁舌の巧みな者と言っているのなら、話は別である。というのはもしこのことを言っているのなら、この人たちの流儀ででではないが、やはり弁論家であるということに、少なくとも私は同意するだろうからである。(一章、17a-b)

原文は、後半の「すなわち」以下の部分をあげる。

…τὸ γὰρ μὴ αἰσχυνθῆναι ὅτι αὐτίκα ὑπ᾽ ἐμοῦ ἐξελεγχθήσονται ἔργῳ, ἐπειδὰν μηδ᾽ ὁπωστιοῦν φαίνωμαι δεινὸς λέγειν, τοῦτό μοι ἔδοξεν αὐτῶν ἀναισχυντότατον εἶναι, εἰ μὴ ἄρα δεινὸν καλοῦσιν οὗτοι λέγειν τὸν τἀληθῆ λέγοντα· εἰ μὲν γὰρ τοῦτο λέγουσιν, ὁμολογοίην ἂν ἔγωγε οὐ κατὰ τούτους εἶναι ῥήτωρ.

protasis	apodosis
εἰ + (**λέγουσιν**) ind.	(**ὁμολογοίην**) opt. + ἄν

文法構成上の当該部分の英訳：

for if this is what they mean, I would agree that I am an orator—not after their fashion.

この構成の可能性は、スミスも「まれな構成 less usual combinations」(§2356) のひとつとして言及しているが、「弁明」では比較的多く見られる。文脈から明らかなように、

この仮定は非現実的なものであるからIrrealisで言うことも可能であるように思われる。帰結部はPotentialisの構成であるから、ポーズとして多少の可能性があるかのように表現することは、修辞上、より効果的であるのかもしれない。

むすび

「弁明」のコンコーダンス（文献18）によると、εἰ の用例が87例、ἐάν が24例である。このうち、εἰ には、「・・かどうか」という目的語文も数例あるので、それを除いて約100例近くのεἰ, ἐάνによる条件文があることになる。本稿で取り上げたものはその中のごくわずかであるが、「もしも」多様な条件文の使用法の一端を明らかにできたならば幸いである。

条件文の理解には、「学校文法」の示す分類が基本的には有効であるが、グッドウィン、スミスの、やや異なる視点からの分類も適宜柔軟に援用して考えることが、真の理解に至る道であると思われる。

註

文法用語はなるべく英語表記にしたが、ドイツの文献を引用している場合はドイツ語表記にしたことが多い。subjunctive, Konjunktiv などと併用している。

文　献

本文で言及しているのは以下のものである。引用は原則としてこの番号で本文中に頁数を記して示した。例：（5，p. 20）は、文献5の20頁。

1.「ソクラテスの弁明」の原文と英訳は、‘Loeb Classical Library, Plato 1’ 所収のものによった。執筆にあたっては、Perseusなどの電子版テクストも活用した。原文の章分けは、一般に行われている内容上の章分けと、Stephanusによるものとを併記したことが多い。本文に箇所を示し、英訳の頁は記さなかった。
2. 邦訳は「プラトン全集1」角川書店、1973年、所収の山本光雄訳によった。

文法書：

3.　田中美知太郎／松平千秋「ギリシャ語入門　改訂版」岩波書店、2001年44版.
4.　高津春繁「ギリシャ語文法」岩波書店、1995年第9刷.
5.　Hermann Menge: Repetitorium der griechische Syntax. München 1961.
6.　Adolf Kaegi: Kurzgefaßte Griechische Schulgrammatik. Zürich/Hildesheim 1992.
7.　Ars Graeca. Griechische Sprachlehre. Neubearbeitet von Rolf Mehrlein u. a. Paderborn 1967.

8. Eduard Schwwyzer: Griechische Grammatik. Zweiter Band, Syntax und syntaktische Stilistik. München 1988(5).
9. Raphael Kühner: Griechische Gsrammatik. Teil II, Band 2. Nachdruck Hannover 1992.
10. E. Ragon: Grammaire grecque. Paris 1973.
11. Herbert Weir Smyth: Greek Grammar. 1920. Renewed 1984.
12. William W. Goodwin: Greek Grammar. Reprinted 1969.
13. William W. Goodwin: Syntax of The moods and tsenses of the greek verb. Boston a. a.（Textkit - Greek and Latin Learning tools 電子版）.

注釈書：

14. 田中美知太郎「ソクラテスの弁明」 岩波書店 1974.
15. F. J. Weber: Platons Apologie des Sokrates. Paderborn u. a. 6. Auflage 1995.
16. Louis Dyer: Plato's Apology & Crito.（Textkit - Greek and Latin Learning tools 電子版）.
17. Armin Müller: Platon Apologie und Kriton. (Aschendorfs Sammlung Lateinischer und Griechischer Klassiker). Münster 1970.

Concordance:

18. Mauro Siviero: Concordantiae in Platonis opera omnia. Pars II: Apologia. Hildesheim/Zürich/New York: Olms Weidemann 1996.

その他：

19. クセノフォーン（佐々木 理訳）「ソークラテースの思い出」 岩波書店 （岩波文庫）昭和 45 年（19）.